様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ００１９１

研究課題名（和文）バッチョ・バンディネッリに関する図像解釈学的研究―クレメンス七世との関係を中心に

研究課題名（英文）Iconological Study of the sculptures of Baccio Bandinelli

研究代表者
甲斐　教行（Kai, Noriyuki）

茨城大学・教育学部・教授

研究者番号：６０３２３１９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：バンディネッリの前半生の庇護者クレメンス七世が枢機卿ジュリオ時代に庇護した人文学者クリストーフォロ・マルチェッリの対話篇『運命について』（1519年起草、Vat. Lat. 5800）を読解し、ジュリオの分身となる登場人物ユリダスが運命決定論とも偶然論とも袂を分かち、人間の意志による運命の変更を可能と考える思想を担うこと、思考の枠組みにおいてプロティノスの影響が顕著なことを明らかにした。またバンディネッリが晩年に起草した『素描の書』を、同時代のヴァザーリ『美術家列伝』やドーニ『素描』と比較して美術批評史の中に位置づけつつ、レオナルドの科学的アプローチの影響とミケランジェロへの敬意を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的独自性は、彫刻家バンディネッリの前半生において一貫したパトロネージを継続した教皇クレメンス七世周辺の精神的文化圏に照らして、バンディネッリの前半生の一連の作品を、個別の状況を超えて包括的に扱うことで、諸作に通底する精神的文脈に基づく図像解釈を実施する点に存する。それは単にバッチョ及びクレメンス七世の再評価という欧米歴史学の最新動向を先駆ける国際的な成果となるだけではなく、欧米の学術的成果の使い回しを乗り越え、一次資料の直接参照による最先端の新解釈を提起するものである。もって日本の西洋史学に及ぼす広範な方法論的・社会的波及効果を期する。

研究成果の概要（英文）： By the careful reading of his autograph Libro di disegno, of his dictated autobiography Memoriale, of the dialogue intitled Disegno written by his friend Anton Francesco Doni, and of the Lives of Giorgio Vasari, we realize that he succeeded the scientific approach of Leonardo, his grand master, and continued to pay his respects to Michelangelo, who is generally seen as his rival.
By the careful reading of the Dialogue "De fato" (1519), dedicated by the humanist Cristoforo Marcello to the cardinal Giulio de' Medici (future Clemens VII), principal patron of Bandinelli, we can realize a significant influence of Plotinus in the framework of thinking, and that Iulidas, its main character and alter ego of Giulio, shows his view that it is possible to change fate by human will.

研究分野：西洋美術史

キーワード：彫刻　ルネサンス　イタリア　図像解釈　カトリック　パトロネージ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

バッチョ・バンディネッリ（1493-1560 年）はミケランジェロ・ブオナローティが支配的な影響力を振るった 16 世紀イタリア彫刻史において、後者とは異なる独自の古典主義的表現を追求した巨匠である。しかしミケランジェロがフィレンツェ共和派と支配階層のメディチ家の双方と関係を保ったのに対し、金細工師だった父の代よりメディチ家に忠実に仕え、とりわけ教皇レオ十世、クレメンス七世の各即位後、生涯を通じてこの家系から特別な庇護を受けたバンディネッリは、ともすれば君主政体の擁護者と解釈され、その作品も批判の対象となってきた。特に当初フィレンツェ政庁舎前に置かれたミケランジェロの《ダヴィデ》（1501-04 年、フィレンツェ、アカデミア美術館）がフィレンツェ共和制を象徴する存在となったのに対し、これと並置されたバンディネッリの《ヘラクレスとカクス》群像（1523-34 年）は、序幕直後より共和派市民の風刺詩の攻撃の的となった。さらにミケランジェロの弟子ヴァザーリは上記群像の委嘱をミケランジェロから奪ったバンディネッリを『美術家列伝』で敵視し、好敵手の金工師・彫刻家チェッリーニもその『自伝』でバンディネッリに辛辣な批判を加えるなど、誹謗中傷が後を絶たず、その後のバンディネッリ評価にごく近年まで影を落としてきた。ヴァザーリの「バンディネッリ伝」に註釈を加えたハイカンプも、ミケランジェロとの比較の上でバンディネッリを評価する弊を免れず、ヘーゲナーのモノグラフ（N. Hegener, *Divi Iacobi Eqves. Selbstdarstellung im Werk des Florentiner Bildhauers Baccio Bandinelli*, München, 2008）も従来の否定的偏見に基づいてバンディネッリの金銭欲や自己神格化を解釈した。2014 年の初の本格的回顧展（フィレンツェ、バルジェッロ国立美術館）においてようやく客観的評価の機運が生じたとはいえ、バンディネッリ芸術の根本的再評価は未だなされていなかった。

バンディネッリの庇護者で前半生のパトロンであった教皇クレメンス七世（1478-1534 年）もまた、父ジュリアーノ・デ・メディチの暗殺（1478 年）、庶出の出自、自身の暗殺未遂（1522 年）と、困難の中で教皇位に昇りつめたものの、暴徒化した神聖ローマ皇帝軍による「ローマ劫掠」（1527 年）をもたらした無能な教皇という否定的な評価が、グイッチャルディーニの『イタリア史』（1537-40 年起草、16 巻 12 章）からパストルの『ローマ教皇史』（L. von Pastor, *Storia dei Papi* etc., 4-2 [1907], Roma, 1912）に至るまで、長年つきまとった。ようやく近年、ライスの博士論文（S.E.Reiss, *Cardinal Giulio de'Medici as a Patron of Art, 1513-1523*, diss. Ph.D., Princeton University, Ann Arbor, 1992）や彼女が編纂に加わった学術論文集（*The Pontificate of Clement VII -History, Politics, Culture*, eds. K. Gouwens, S.E. Reiss, Aldershot, 2005）などによって、客観的かつ多角的な人文主義者＝学芸保護者としてのクレメンス像が検討され始めたとはいえ、彫刻家バンディネッリとクレメンスの親密な関係に着目した総合的研究は研究開始時には皆無に近かった。

クレメンス七世はその枢機卿時代を含め、バンディネッリの前半生における最大の理解者・パトロンであり、彼が委嘱に関与ないし献呈を受けた作品は少なくとも十点を数える。またバンディネッリと教皇との親密な関係を証言する『備忘録』の存在や、バンディネッリが教皇と同じ「無垢の白」（Candor illaesus）を自らのモットーとし（P. Giovio, *Dialogo dell'imprese militari e amorose*, ed. M.L. Doglio, Roma, 1978, p.67; n.84）、教皇没後も自身のメダル裏面（1550 年代、Ｌ・レオーニ鋳造）に用いた事実、この教皇に因んで庶出子にクレメンテと命名したというヴァザーリの記述等を総合すると、両者に通常のパトロンと芸術家以上の人間的・理念的共鳴を想定するのが当然であるにも拘わらず、従来そうした研究はなされてこなかった。

そもそもクレメンス七世の精神的文化圏の探求それ自体がいまだ不十分な状況は、ヴェネツィア出身の人文学者クリストーフォロ・マルチェッロ（生年不詳―1527 年）が枢機卿ジュリオ・デ・メディチ時代のクレメンスに献呈し、ジュリオの分身が登場人物として主役を担う重要な対話篇『運命について（*De fato*）』（ヴァティカン図書館ラテン語写本 Vat.Lat.5800、1519 年ローマにて起草）に本文の書き起こしさえ存在せず、本格的な考察がほとんどなされてこなかったことからもうかがえる。対話篇の内容が煩瑣な哲学的議論であり、論旨の理解が必ずしも容易でないこともひとつの要因であるが、本研究ではこうした文献の読解にも取り組むことにした。

２．研究の目的

本研究は、ヴァザーリの『美術家列伝』での批判的な記述以来、野心的で栄誉欲の強い彫刻家というレッテルが貼られた旧来の否定的なバンディネッリ像と、グイッチャルディーニの『イタリア史』以来、勇気と決断力に欠けた無能な教皇として過小評価されてきた教皇クレメンス七世像を覆し、メディチ家出身の教皇=パトロンの人文主義的理想を共有しつつ、作品にその理念を表現していく彫刻家の思想と芸術を浮彫りにすることにより、従来の研究の欠落を埋め、公平かつ包括的なルネサンス像を提示することを最終目的とした。

具体的には、バンディネッリの前半生の諸作品をクレメンスの思想に照らして図像解釈を実施するが、一連の作品を包括的に扱うことで、一点ごとの作品分析では困難な、諸作に通底する精神的文脈を明らかにすることを目指した。

そのために、クレメンス七世を支える精神的文化圏がどのようなものであったのかを、枢機卿

時代のクレメンスに捧げられた対話篇『運命について』の読解などを通じて検討し、バンディネッリの作品解釈のための礎石を築くことにした。またバンディネッリ自筆の『素描の書』、晩年のバンディネッリが息子チェーザレに口述筆記させた自伝『備忘録』、バンディネッリが登場人物として活躍するアントン・フランチェスコ・ドーニ『素描』などの資料を検討し、その歴史的意義を明らかにするとともに、バンディネッリの芸術思想の理解の一助とし、作品解釈の前提の確立を目的とした。

３．研究の方法

令和元年度（7月末～9月前半）、令和3年度（8月中旬～9月末）ともに夏期におけるイタリアでの資料収集・実地調査・作品撮影を実施した。令和2年度はコロナ禍により現地調査が実施できなかったが、国内における資料解読・分析を中心に研究を進めた。

その具体的な内容は、フィレンツェ国立中央図書館でのバンディネッリ文庫写本調査と、1541年までに完成したバンディネッリの前半生の諸作、特に枢機卿時代を含むクレメンス七世が委嘱に関与または献呈を受けた作品――《オルフェウス》（1519年頃、フィレンツェ、メディチ＝リッカルディ宮）、《巨人像》二体（1519年、ローマ、ヴィッラ・マダマ）、《ラオコーン》模刻（1520年、フィレンツェ、ウフィツィ美術館）、銅版画《聖ラウレンティウスの殉教》（1525年頃、M・ライモンディ版刻）、《ヘラクレスとカクス》（1534年、フィレンツェ、シニョリーア広場）、大理石浮彫《キリストの笞刑》（1530年頃、オルレアン美術館）、《クレメンス七世のメダル》（1532-33年、F・ダル・プラート鋳造）、《レオ十世墓碑》《クレメンス七世墓碑》（1541年、ローマ、サンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ聖堂）等――に関する文学・神話・聖書等の典拠の再確認、そしてバンディネッリの表現との一致点と相違点等に関する検討をした。

また作品解釈のための前提条件として、バンディネッリ自筆の『素描の書』、晩年のバンディネッリが息子チェーザレに口述筆記させた自伝『備忘録』、バンディネッリが登場人物として活躍するアントン・フランチェスコ・ドーニ『素描』などの資料を検討し、バンディネッリの芸術思想を明らかにすることによって作品解釈を補った。

さらに、枢機卿時代のクレメンス七世が対話篇の登場人物として活躍するクリストーフォロ・マルチェッリ『運命について（*De fato*）』（ヴァティカン図書館ラテン語写本 Vat.Lat.5800、1519年ローマにて起草）を子細に検討することで、クレメンス周辺の人文主義的文化圏の特質を解明し、バンディネッリ研究の礎石を築いた。

令和 2 年度と 3 年度には、研究成果を『五浦論叢』（茨城大学五浦美術文化研究所紀要）などに掲載することを目指した。

４．研究成果

（1）バンディネッリが晩年の 1550 年代に起草した『素描の書』の冒頭には、人間の内面に着想される高貴な理念としての先験的素描概念が示されている。ヴァザーリは『美術家列伝』第一版（1550 年）では「絵画について」の中で素描を主として実践的側面から説いていたが、第二版（1568 年）に至って文章を追加し、素描の知性的・理念的性格をいっそう強調している。このような観点から、ヴァザーリの記述の追加とバンディネッリの『素描の書』との関連がフェネク・クロークによって示唆されている（A. Fenech Kroke, “La réception des Vite de 1550: le cas de Baccio Bandinelli”, in *La réception des Vite de Giorgio Vasari dans l’Europe des XVIe-XVIIIe siècles*, ed. C. Lucas Fiorato, P. Dubus, Genève, 2017, pp.93-111）。

若い徒弟たちの困難を解消するという『素描の書』本来の教育的意図は、ヴァザーリらによるフィレンツェのアカデミア・デル・ ディセーニョ創設（1563 年）に 30 年以上先んじてバンディネッリがローマで開いていた、私的なアカデミアに認められる。1530 年に自身の構想に基づいてアゴスティーノ・ヴェネツィアーノが版刻したエングレーヴィング《バッチョ・バンディネッリのアカデミア》にその様子がうかがわれる。《バッチョ・バンディネッリのアカデミア》には、のちにエネア・ヴィーコが版刻した別構図のヴァージョンも存在し、こちらは『素描の書』の執筆年代に近い 1540-50 年代の制作と考えられる。画面左手で作業を中断して思索に耽る老人の存在が、実践に加えて必要とされる素描の知的側面を強調していることにはすでに指摘がある（Fenech Kroke, *op. cit.*, pp.108-109）。

1490 年代、ミラノ宮廷に滞在中のレオナルドは、ACADEMIA LEONARDI VINCI（レオナルド・ダ・ヴィンチのアカデミア）と記銘のあるエングレーヴィングを六点制作した。この意匠が多分に人文主義的色合いの強い会合のためだった可能性は高い。師であるルスティチの工房でレオナルドの教えを受け、ローマ滞在中のレオナルドとの再会を『素描の書』第２章で回想したバンディネッリは、人文学に匹敵する美術と素描の崇高化においてレオナルドの衣鉢を継ぐ存在であり、人体の寸法の研究や表情の類型化についても近い見解を抱いていた。

またヴァザーリはバンディネッリがミケランジェロを敵視していたとする挿話を伝えるが、それらは必ずしも実証的な論拠をもたない。むしろ『素描の書』や『備忘録』にはミケランジェロへの評価と敬意、言説の引用が認められる。物理的計測を超えた優美を主張するミケランジェ

ロの思想は、『素描の書』に見られる、尺度を完全に身につけたうえで、実践の過程で得られた感覚に基づいて優美を追求する、という方向性と重なる部分がある。実際バンディネッリ壮年期の代表作《ヘラクレスとカクス》（1523-34 年、フィレンツェ、シニョリーア広場）では丸みを帯びた輪郭が細かく反復されて幾何学的に人体を構成しているように見える。一方、尺度に基づく理性的認識を超越し、「幾何学的構成」を経験的認識へと高めようという『素描の書』の要請は、同書起草と同時期の 1551 年に完成した《アダムとエヴァ》の優雅な抒情性に認めることができよう。

（2）バンディネッリの前半生の作品の解釈においては、庇護者である教皇クレメンス七世周辺の精神的文化圏の検討が重要な出発点となる。これについては、ヴェネツィア出身の人文学者クリストーフォロ・マルチェッリ（生年不詳―1527 年）が枢機卿時代のクレメンス（ジュリオ・デ・メディチ）に献呈した対話篇『運命について』（1519 年起草、ヴァティカン図書館ラテン語写本 Vat. Lat. 5800）に登場するユリダスの発言の検討がジュリオの人文主義的教養の理解を助けることが想定される。ユリダスの名は作品の献呈対象であるジュリオ・デ・メディチ枢機卿のラテン名ユリウスに由来し、ジュリオの分身的存在である。本研究は、ユリダスがジュリオ枢機卿の分身として、運命決定論とも偶然論とも袂を分かち、人間の意志による運命の変更を可能と考えること、同写本がキケロ、プラトン、アリストテレスを参照しながらも、大枠としてプロティノスの問題提起に沿った構成であり、結論部でユリダスがプロティノスを自己の拠りどころとみなしたことを、つまり思考の枠組みにおいてプロティノスの影響が顕著なことを明らかにした。

対話篇『運命について』は、短い献辞の後、偶然論者フィロティキウス、運命決定論者アドラストゥス、中間派ヌメニウスの三者の議論が続き、17r.に至ってようやく四人目のユリダスが登場し、プロティノスの『エネアデス』第三論集第一論文を議論の出発点に据える。プロティノスは人間を運命に従属させる恐れのある四つの理論、すなわち原子を始原とする唯物論的運命論、万象を世界魂が決定するというストア派的運命論、天（星々）の運行が決定するという占星術的運命論、万象の因果の連鎖を主張するストア派思想を批判して、知見と徳に従って意志し行動する人間の自由を認める。

ユリダスはまずプラトン『法律』第十巻で挙げられる十種類の運動変化に言及しながら、デモクリトスやエピクロスが主張した原子論への反駁を行う。次にストア派が主張する「浸透力」（世界霊魂）への反駁を行い（20r.-21r.）、多種多様な生物や存在を考えると、たった一つの魂がすべてを司ることはありえないと主張する。次に、天体の影響が人間に及ぼす力について反駁し（21r.-24r.）、「惑星のしるしをいささかも示さない多数の事象が私たちの肉体の中に見出される」というプロティノスに基づく見解が論拠として示される（21r.-21v.）。またキケロ『運命について』第五章十節を典拠として、人相学的に決定された性格と本人の活動とが不一致である点がソクラテスの例を引いて指摘され、人間の自由意志を尊重する議論が展開される。続いて因果の連鎖がすべてを決定するというストア派の主張への反駁が開始される（24r.-32r.）。アリストテレスの『自然学』第二巻、『命題論』、『形而上学』第六巻を論拠に、またキケロ『運命について』で言及される主としてストア派の哲学者たち、さらにはエピクロス、デモクリトスの見解を検討するが、必ずしもキケロに即した論旨は展開していない。

プロティノスが批判する四つの決定論のすべてに反駁したのち、ユリダスは逍遙学派とアカデメイア派を二人の艦長として真理を目指す航海に出発すると述べ、ヌメニウスの求めに応じてアドラストゥスの議論を要約して反駁する。

最後に、ユリダスは万物を統括する一者〔神〕をプロティノス風に讃美し、「私はプロティノスばりに（plotini more）、肉体に内在していることに恥じ入るのです」と述べて、対話篇を結ぶ。

この哲学者はヌメニウスによっても「学問の流派における、私たちのプロティノス（Plotinus noster in achademica familia）」（8r.）として言及されている。フィレンツェではマルシリオ・フィチーノが 1484 年に『エネアデス』のラテン語訳に着手し、1492 年に自身の詳細な註釈を含む印刷本を出版するなど、プロティノス研究が盛んに行われた。対話篇の著者マルチェッロはフィレンツェ滞在中にフィチーノの弟子フランチェスコ・カッターニ・ダ・ディアッチェートと親交を得る機会があった。対話篇が献呈されたジュリオ・デ・メディチ枢機卿もまた、従兄ジョヴァンニ・デ・メディチ（のちのレオ十世）の家庭教師を務めたフィチーノらの指導を仰いでいた。このように、「私たちのプロティノス」はバンディネッリ前半生のパトロンであるジュリオ枢機卿と人文学者マルチェッロに共通する文化的基盤であったことが確認できる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 甲斐教行	４．巻 27
２．論文標題 バッチョ・バンディネッリの芸術思想――『素描の書』を中心に――	５．発行年 2020年
３．雑誌名 五浦論叢（茨城大学五浦美術文化研究所紀要）	６．最初と最後の頁 85-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 甲斐教行	４．巻 70
２．論文標題 バッチョ・バンディネッリの美術理論――レオナルドとミケランジェロとの関係を中心に	５．発行年 2021年
３．雑誌名 茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学、芸術）	６．最初と最後の頁 41-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 甲斐教行	４．巻 28
２．論文標題 クリストーフォロ・マルチェッロ『運命について』とその典拠をめぐる考察	５．発行年 2021年
３．雑誌名 五浦論叢（茨城大学五浦美術文化研究所紀要）	６．最初と最後の頁 21-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関